

P-331

大規模災害訓練に参加した看護学生が認識していること

石巻赤十字病院

○小原 徹、新田 聖美、長谷川 礼、三浦やす子、村上めぐみ、渡辺 美枝

A校は宮城県北東部に位置する3年制の看護専門学校である。A校の学生は3年次に病院が主催する大規模災害訓練へ、被災者やその家族の思いや、救助者として求められることを考える機会を得る目的で傷病者役として参加している。今回訓練に参加した学生36名に対し「災害時、自分にできること」というテーマで訓練終了後に自由記載したレポートを提出してもらい、レポート結果を「災害時学生ができること」と「災害時に対し学生が準備できること」に分類しテキストマイニングで分析した。

【結果】「災害時学生ができること」の高スコア単語は「傷病」「傾聴」「寄り添う」「被災者」「クッキング」「バイタルサイン」「感染対策」がみられ、共起キーワードとして「傾聴」「寄り添う」など、こころのケアに関する単語が多くみられた。技術に関連した単語として「バイタルサイン」「測定」「処置」「観察」など簡単な処置に関する単語や、「環境」「整備」など基礎看護技術に関連した単語が多く見られた。「災害に対し学生が準備できること」の高スコア単語は「トリアージ」「避難行動」「災害医療」「避難場所」「備蓄」「訓練」がみられ、共起キーワードは「防災意識」「高める」「避難経路」「避難場所」「など避難行動に関する言葉がみられた。また「学び」「深める」など意識と知識の準備に関する言葉がみられた。

【考察】全体をとおして被災者やその家族の思いを開き取る具体的な行動や、災害発生時の対応に向けた準備や、看護学生として行動するための学びの必要性を理解することで、共助・自助について具体的に考えられていたことがわかった。

P-333

当院における臨床輸血看護師の活動報告

高知赤十字病院

○島巻 真美、前田 智子、小川さやか、湯田平千春、公家 典子、二宮かなえ、市村亜沙美、溝瀨 樹

【はじめに】当院では輸血管理科Iを算定し輸血療法委員会(委員会)が院内輸血業務の管理を行っているが、輸血の知識を持った現場で働く看護師の参加はなく、業務の指導やインシデントの集積、改善策の検討等の積極的な介入が行えていない状況であった。しかし、臨床輸血看護師を取得後、委員会への参加を開始、その後の当院における臨床輸血看護師の活動について報告する。

【活動内容】2018年に4名が臨床輸血看護師の資格を取得後、委員会への参加を開始し、委員会での役割として監査業務に取り組んだ。資格取得者が年々増え、臨床輸血看護師を中心に、委員会の下部組織としてワーキンググループを立ち上げ、委員会事務局である検査部と共同しマニュアルの作成と改訂、輸血現場での監査の実施と結果検証等を開始した。臨床輸血看護師は、輸血の頻度の高い救急外来、ICU、手術室、外科、血液内科病棟に配属されており、通常業務中にも輸血療法の指導的な立場で業務にあたり、入職時の新人教育、輸血インシデントの情報収集をし、改善策の検討を行っている。経験年数豊富な看護師が新しいマニュアルを把握していない等の現状があり、臨床輸血看護師が中心となり各病棟に出向いて輸血の勉強会を実施、1年間で院内看護師165名(約35%)の参加があり、その結果インシデントの報告も減少しているため、今後も活動の継続が必要と考える。

【まとめ】院内の臨床輸血看護師が増加し、輸血業務の監査と指導、教育、マニュアル作成や改訂、インシデント分析等に積極的に参加するようになった。今後、県内の輸血・細胞治療輸血研究会での情報共有を通して、院内と県内の安全な輸血療法の実施に貢献していきたい。

P-335

認定看護師が地域の医療・介護職向けに実施した研修の有用性

古河赤十字病院

○青木 紀子、小林裕紀子、栗山 知子、菊田 幸子、霜田 春子、後藤貴美子

【はじめに】認定看護師は実践・指導・相談とともに、院内にとどまらず、地域にむけた活動も大きな役割である。当院は地域医療支援病院であり、現在6分野8名の認定看護師が在籍している。当院での認定看護師の役割として、近隣施設との連携強化や、顔の見える関係性の構築、地域全体の患者ケアの質向上への活動促進が必要である。また、地域へ向けて当院の認定看護師を活用して貰うためのアピールの場を設けたいと考えた。そのため、平成30年度より当院主催の研修会を実施し、5年間で21施設の医療・介護職の参加がみられた。研修の内容が自施設で活用されているのかアンケート調査をしたので報告する。

【目的】認定看護師会主催の研修会の有用性を明らかにする

【方法】平成30年から令和4年までに行った研修会参加者にアンケート調査

【結果】実施した研修によって知識が深まった39.1%、どちらかといえば深まった60.8%であった。また、研修の内容が、日々の業務に活かされているかについては、活かされている13%、どちらかといえば活用できている60.8%と半数以上が活用できている状況であった。意見からは、疑問や不安が聴ける相談の場があるので安心するという回答結果が得られ、研修講師の依頼もみられるようになった。

【考察】アンケート結果より、気づきや知識の深まりなどの回答が得られたことから、地域における認定看護師のニーズが高いと考える。また、研修の内容が自施設で活用できているとの結果から、ケアの質の向上に繋がったと考える。認定看護師の存在を知り、相談できる関係性が図ることができた。今後も地域全体の看護の質向上に繋げるために継続し、研修以外でも相談に対応出来る情報提供やシステム作りを目指していきたい。

P-332

当院看護師のキャリア開発に関する現状と課題

京都第一赤十字病院

○藤野 早苗、山本 沙織、坂本 寿美、山田 美美、足立 侑、山内 緑

【はじめに】昨年度の取り組みで、当院看護師は患者へケアを行うことに関しては高いモチベーションが維持されているが、今後のキャリア開発に関しては消極的であることが考察された。今年度は当院看護師のキャリア開発に対する現状を明らかにしたいと考え取り組みを行った。

【目的】当院看護師のキャリア開発に関する現状と課題を明らかにする。

【対象・期間】所属部署の看護師 2023年1月6日～1月16日

【方法】狩野が開発した「職業キャリア成熟測定尺度」を参考にアンケート調査を実施、集計した。

【結果・考察】「今後のキャリアの方向性」については「方向性がある」26.6%、「考えているが決められない」47.7%であった。複数みられた意見はやりたいたいが決まっていけない、子育てを優先したいなどで、やりたい看護への動機づけやWLBの支援が求められている。「キャリア開発の自覚」については「順調」14.1%、「停滞」38.3%、「どちらでもない」47.7%であった。現状に精一杯でキャリアについて考えられないという意見と、キャリア開発に興味がないという意見を散見した。「組織に求める支援」については学会等への参加支援が大半であった。組織や上司からの支援が有効であることは、先行研究でも明らかで、本調査とも一致していた。一方で、様々な分野における看護師の姿をみたいという意見もあった。山本は「キャリア目標を持っている方がプラトニーを抑制している」とし、高山らは「一人でキャリアについて考えるだけでなく、周囲からのキャリアに対する支援があることで次なる自分の役割を意識できることから内容プラトニー化を抑制すると考える」としている。まずは個々の看護観を高め、今後の展望を早い段階から想起できるような支援や、専門分野で活躍している看護師との協働の機会を持つことが求められる。

P-334

3領域の認定看護師が協働した、自潰乳がん患者に対する看護支援

大分赤十字病院

○鈴木 理恵、亀井奈央子、小出 良子

【はじめに】薬物療法の効果が乏しい自潰腋窩リンパ節転移のある乳がん患者に、乳がん看護認定看護師(以下BCN)が主体となって、他領域の認定看護師(以下CN)と協働し、看護支援を行った。結果、患者は治療を完遂し苦痛が軽減できたので報告する。

【経過】自潰した腋窩リンパ節転移、肺転移、肝転移を伴う乳がん患者。2レジメンの化学療法を行ったが、いずれも腋窩リンパ節だけが増大した。BCNは初診時から介入し支援していた。リンパ節への放射線治療(以下RT)を開始したが、自潰した手掌大のリンパ節からの出血や浸出液による貧血と脱水、痛みでADLが低下し入院となった。リンパ節に有効と考えられる治療はRTであり、RTの完遂は第一の目的であった。BCNは自潰部のケアと疼痛コントロールが必要であると判断した。皮膚排液ケアCN(以下WOC)と連携し、刺激の少ないケア計画を立案、病棟Nsと本人に指導した。がん性疼痛看護CNは緩和ケアチームで介入し、医師と相談し内服調整と服薬指導を行った。BCNは、本人が治療効果に神経質になる気持ちを受け止め、RTの効果は終盤～終了後に現れることを繰り返し伝えた。また服薬以外での疼痛緩和の方法を提案した。今後の治療方針を確認し、治療の情報提供や退院支援を行った。その結果、退院後に自潰部は縮小し、外来治療を継続できた。

【結論】乳がん治療はサブタイプやステージによって大きく異なり、組み合わせも様々である。BCNはそれを理解し、治療経過における患者のニーズや目標をチームで共有した。さらに全体のマネジメントを担い、CNと協働し専門的で最適なケアを選択し、継続した。結果、患者は専門的でシームレスなケアを受け、治療と療養生活を維持できた。BCNがマネジメントを行い、継続的に支援することは、患者の治療意欲を支え、治療完遂の一助となる。

P-336

ドクターカー運用開始に向けた看護教育について

日本赤十字社医療センター

○雨宮 伸樹、菊池亜希子、林 宗博、諸江 雄太、山下 智幸、大浦 美穂、平良 弥子

【背景】当院では、2020年10月よりドクターカーの運用を開始した。初めて導入される事業であった上、立ち上げの時期はまさにコロナ禍にあり、救命救急センターのスタッフが一人となって士気を高め、また一人でも多くのスタッフがドクターカーになれるような教育体制を構築することが課題であった。

【教育内容と考察】通常ドクターカーナースには高いアセスメント能力と限られた資源のもとで活動する実践力が求められる。しかし当院にはこのような高度な要件を満たすドクターカーを経験したことがあるナースがいなかった。そのため乗車経験のある医師や救命救急士との協力を得つつ、現場での安全管理等を最優先し、当院独自の教育システムを構築した。教育には1年という歳月をかけ、プレホスピタルケアの知識と技術の獲得を目指して、安全に乗車できるようシミュレーションやオリエンテーションを丁寧に行った。結果55名のドクターカーの乗車資格を有するナースが誕生し、2020年の10月に運用を開始した。ドクターカー事業のために立ち上げられたドクターカー分科会では、教育・訓練、調整・企画、検証・検討の3部門に分かれて活動を行っているが、運用開始後はこれら3部門間で様々な方向から検討や検証を繰り返し行い、教育や業務の修正・見直しを適宜行っている。

【結論】運用開始から2年半、現在に至るまでに現場での大きな事故はない。「0」ペースからスタートし、救命救急センターが一丸となって取り組んだことで、多くのドクターカーナースが誕生し、現在では安定運用ができるまでに成長している。今後は今のドクターカーナースが次世代ナースを育てるeducatorの育成を進め、さらに発展させてゆきたい。